

問題“不”解決型学習講座①

——生徒に“もやもや”を植え付けるべし——

三島由紀夫の著作に『不道德教育講座』というものがあります。目次を開いてみますと「知らない男とでも酒場に行くべし」「教師を内心バカにすべし」「大いにウソをつくべし」云々という勢いで、世の中の「道德」をあざ笑うかのような次第です。この元ネタといえば、井原西鶴（江戸時代の小説家）が中国の『二十四孝』のパロディーとして書いた『本朝二十不孝』のようですが、三島曰く、くすぐったくてわざとらしい親孝行話より、思い切った親不孝の話の方が面白く、「へえ、親不孝にも上には上があるもんだなあ」と妙に及びたい気持ちになるもんだとのこと。しかも「不道德を一つだけ持っていると危ない、できるだけ沢山持って、その間のバランスをとるようにすべきだ、ということです」。ウソ付きという不道德だけ持って、詐欺師になる前に、「他人の彼女がほしくなる」とか「ものすごいケチ」と言った不道德も持ち併せておけば、「毒を以て毒を制止し合ったり、あるいはお互いに一致協力して活気を加えたり、なかなか有効な働きをします」。三島はこのエッセイの中で、こういう具合になかなかウィットに富んだ話を展開するものですから、日常や社会の「道德」という鉄拳にうんざりした時は、こういう「不道德」を摂取してクスッと笑いながら、「道德」を身につけてみるのもおすすめです。

つつい前置きが長くなってしまいましたが、読者の中には、もう「問題不解決型学習講座」という表題の意味にお気づきになった方もいらっしゃるでしょう。このような試みは、三島の二番煎じになれば上等といったところでしょうが、昨今の流行りの「問題課題型学習」なるもの——道德も「特別の教科」に格上げ(?)されるぐらいに政治の世界では一時流行ったみたいですが——を大真面目に語るのも嫌なので、ここはあえて、問題不解決型学習、つまり、問題を解決しないことを学ぶことこそ、問題解決力を身につける第一歩なのだと逆説的に書いてみたいと思います。ところで、私が書く文章は冗長だと色々な友人からクレームを言われます。次は短くと約束したのですが、「友人を裏切るべし」と三島も書いているので、長文（しかも数講座続く予定）にて失礼します¹。

¹ 今回こそ注を入れずに書こうと思ったのですが、「アカデミックマナー」なる道德に毒されて、書誌情報や注を書かないと気が済まないタチになってしまったので、今回も書きたいと思います。（引用文のページを書かず、このような位置で出典を明示するのは、アカデミックには道徳的ではありませんが、）三島由紀

大学も4年目の折り返しを過ぎたところでありますが、前期に教員免許を取得するために教育実習に行きました。そこでの経験は本当に貴重なもので、私の学習観を大きく転換させるものでした。おまけに、研究が一番やりたいことだと思い込んでいたこの自分が、教員という仕事もまた、大変な負担がかかるものではありながら、他にはないやりがいを感じる良き選択肢の一つだと思えたほどです。母校では2週間しか実習できないということだったので、3週間（中学の免許取得に必要）の実習を、東大の附属学校で行いました。現行の学習指導要領のモデル校になっている附属は、「協働的な学び」を早くから取り入れてきた中等教育学校（外部編入がない中高一貫）として知られ、グループやクラス全体で話し合いを中心としたスタイルの授業で6年間学びます。生徒の意見交流も活発でした。私は中学3年生の「公民」を担当し、社会権について授業をしました。社会権は例えば、「健康で文化的な最低限度の生活」でお馴染みの生存権や、ストライキや労働組合を保障する労働三権、義務教育が保障する教育を受ける権利などのことです。

附属での3週間は、かねて興味を持っていた「シティズンシップ教育」を実践の場で訓練させてもらう絶好の機会となりました。「公民」は権利など抽象的な概念が多いため、多くの生徒にとって関心を持ちにくく、理解のハードルも高いテーマだと想定されます。生徒の関心を引くためにも、単に教科書の内容を整理するのではなく、なぜ権利が必要なのかという根源に立ち戻って一緒に考えてもらう授業を目指しました。明治時代の工女の劣悪な労働環境を紹介する当時の報告文²や契約書を見せて、労働三権の必要性を考えたり、イーロン・マスクが「兆万長者（資産1兆ドル超え）」になったことを伝える新聞記事³を読んで、所得格差の是非に関心を持ってもらい、公正な社会とは何か思考実験したりしました⁴。労働問題や格差といった重いテーマではありましたが、中学生にとって見たことがないだろう数値や出来事を提示すると、生徒の顔付きや教室の空気が一瞬にして変わるのが直接伝わってきて、印象的でした。「なるほど」「確かに」と聞こえてくるなど、手応えを直接感じる事ができ、当初の目論見としては良い結果を出せたような気がします。

一方で、指導してくださる先生とのやりとりを重ねる中で、生徒がどのように学んでいる

夫『不道德教育講座』、角川文庫、1999年

² 横山源之助が著した『日本之下層社会』です。労働者の権利が明確には保証されていなかった時代の厳しい労働環境について記載があります。

³ <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGN12CNV0S6A610C2000000/>（たまたま授業の2日前に読んだ記事を使いました。新聞を読むのは大事ですね）

⁴ 他にも、誰でも東大に入れるのかという問いを立て教育格差を読み取ったり、不正受給バッシングが多い生活保護について、補捉率（基準を満たしている人のうち、実際に受給している割合）が先進国で低いことを指摘し、その解決を考えたりする授業をしました。「努力すれば東大に入れる」「生活保護になるのは努力していないから」などといった印象論に基づく「正義」をふりかざす意見がSNSで飛び交う社会の中で、データに基づいて議論する重要性を伝えられたら良いなという思いで授業をしました。

のかという視点が自分に欠けていたことが見えてきました。というのも、それまで私は、教師の立場から「どう教えれば良いか」ばかりに目を向け、授業の「分かりやすさ」や「正しさ」ばかりを追求していたように思います。例えば、生徒がデータを誤った仕方を読み取ったり、資料から誤った考察をしたりした際には、自分の授業の展開に問題があると思って、次の授業では手厚い誘導をしようとしていました。そんな私に先生は「生徒が間違えること自体は悪いことではないんじゃないかな。むしろ、それによって生徒の思考が喚起されていくことが重要なんじゃない？」「授業で答えが出なくても良い。むしろ卒業後もずっと考え続けられるような“もやもや”を生徒の心に生じさせることの方が学びは大きいと思っています」という言葉を投げかけてくれました。分かること、正解することが尊ばれ、少しの失敗で袋叩きに合うこの世の中で、せめて教室だけは誤りが許容される空間であってほしいと思います。そして、その「誤り」は決して白黒付くものではないでしょう。「道德」と「不道德」の間だってそうですし、「不道德」という間違いがある方が、「道德」という正解にこだわって窮屈になった人生よりも、かえって健康的で、その意味では正解でもありそうです。教師が正解を言ってしまっただけは、生徒は間違えることができず、そこから成長するという体験を積むことができません。もっと言えば、生徒が正解に辿り着かないままの方が、長い間考えることになって、より成長が見込めるのではないのでしょうか⁵。

先ほど述べた公正な社会とは何かという思考実験の授業を例にとってみましょう。世の中にはイーロン・マスクのような圧倒的な経済的強者もいれば、日々の生活や食事に困る経済的に「恵まれない」方々もいます。私は授業で、格差そのものは良いか悪いかと問いました。私は悪いという意見が多数派だと思い、アリストテレスやノージックを参考に、正当な方法で富を得た結果の格差は悪とは言いきれないと言って、問題の難しさを考える予定にしました。しかし、結果はその真逆で、格差については仕方ないという意見が大半でした。そのため、格差を擁護するこの話は、非常に生徒受けが良くありませんでした⁶。ツイッターの社名変更などもありイーロン・マスクの評判は悪いイメージだったので、彼が「兆万長者」になったと聞くと、もらい過ぎだろという批判が出てくるものと思っていましたが、自由競争万能主義の中学生には「格差＝悪」という図式はなかったようです⁷。

生徒の予想外の反応にたじろぎながらも、なんとか授業を進めて、「あなたは、どういう所得・家庭・健康状態に生まれるか分かりません。その場合、どういう社会を作りたいです

⁵ 最近、ショート動画などの SNS や生成 AI で若者の思考力が云々と言われていますが、こういう時代だからこそ、「3分で分かる」を謳って思考をキャンセルしないようにしなければいけないと思います。

⁶ 自分の意見と異なることの方がウケが悪いような気もしますが、実はその逆で、もう知っているような結論を強化する話は意外にもつまらないものです。むしろ、これまでなかった視点から、自分とは逆の意見が出ると生徒は反応を示し始めました。

⁷ 学校という場合は、試験の成績(＝努力の量?)が平等に評価されるという建前で動いています。そのため、生徒が自由競争に絶対的信頼を置くのも理解できますが、現実では努力が報われるとも限りません。

か」というロールズの思考実験(無知のヴェール)を簡易化したものを、クラスで考えてみることにしました。格差についてそこまで考えたことがない中学生からは、「機会均等」と「自由競争」が大事だという意見こそ出てきても、ロールズのように分配の概念はなかなか出てきませんでした。しかし、「じゃあ、もし、病気にかかったり事故に遭ったりして、働けなくなったらどうする？機会均等と自由競争だけで本当に良いのだろうか⁸」と問いかけると、生徒たちがもやもやし始めたのが見て取れました。僕はおそらくここで授業を切るべきだったでしょう。ロールズは高校1年生が学ぶ「公共」の内容ですから、あえてここで宙ぶらりんにさせることで、ロールズを学んだときに受ける衝撃は大きなものとなるはずで、こうした体験は、おそらく、生存権とは「健康で文化的な…」と暗記するよりも深い学びで、自分の境遇や思考を見直すきっかけになるとと思います。ただ私はあまりにも「道徳的に」、生徒が間違えないように、生存権を教え込んでしまいました。

「もやもや」を授業で生徒に抱かせることは、教師の役割を教えることだと定義する人にとって、「不道徳」な意地悪に見えるでしょう。しかし、上述したようにこれは、かえって「道徳」的なものかもしれません。こんなの詭弁だと言われたら何も言えませんが、とりあえず、詭弁を弄して読者を“もやもや”させるべしとでも言うておいて、初回を締め括ろうと思います⁹。

教員免許すらまだ取得していない弱冠を少し過ぎた人間が、ましてやほとんどの場合、人生の先輩であるだろう読者の皆さまに対して、勝手に「問題“不”解決型学習講座」などを開いて、このような大口を叩くのは大変「不道徳」な限りですが、三島が「できるだけ自惚れよ」と書いておりますので、どうかご容赦ください。次回は「哲学の問題は未解決にすべし」というテーマです。

⁸ ロールズについてご存知の方は、これが「無知のヴェール」の思考実験の本来の在り方からは離れる問いであるということがお分かりかと思いますが、社会契約後の社会での出来事は、この思考実験では考えていません。ただ、中学生と考える時に、その厳密さは邪魔になる場合もあるでしょう。

⁹ 私は注2の中で、「データに基づいて議論する重要性」と偉そうに書きましたが、この議論を一読したた分かる通り、私の議論は何のデータにも基づいていません。しかし、これが「誤り」であるとしたら、ウェルカムです。若気の至りでしたと訂正され、成長できることを期待します。このような「不道徳」をお許し下さい。